これからの総社を左右する

2つの会

■高梁川新架橋整備方針審議会

昨年5月に完成した高梁川左岸側（中原地内）の橋台から、高梁川と西部地区を望む

白紙に戻し検討

「白紙に戻して、やるかやらないかを考えていただきたい」。高梁川新架橋について、今後の整備方針を審議する第1回の「高梁川新架橋整備方針審議会」が4月30日、総合福祉センターで開かれ、その冒頭で片岡市長が、審議会への諮問のお願いのなかでこう話しました。

市は審議会に対し、高梁川新架橋を建設するかどうかについての整備方針を諮問しました。審議会は、今後月1回のペースで開催され、橋の必要性をはじめ、費用や市の財政状況などの検証を行い、答申内容をまとめます。答申は8月の予定です。

審議会の委員には、学識経験者や各種団体の代表、市民代表など20人を委嘱。会長には岡山県立大学デザイン学部の山田孝延学部長が選任されました。

高梁川新架橋は、下の地図のとおり清音柿木地内を起点に、富原地内までを結ぶ清音神在本線の一部です。清音神在本線の総延長は3300m。計画されている橋は、長さ660m（国道486号の中原口交差点から県道宍粟真備線までの区間）で、片側一車線、片側歩道のものです。

清音神在本線の整備費用は、当初計画で61億円。補助金や合併特例債を除いた市の負担額は全体の約15%にあたる約9億2000万円です。平成17年度から昨年度までに、橋台の建設や測量、用地取得などで8億2700万円を投入しています。

この日は、これまでの経緯や予算など、橋についての共通認識を図りました。山田会長は、「諮問された橋の整備方針については難題だと思いますが、皆さんの意見を聞いて、合意形成を図りたい」と話しました。

問い合わせ　土木課土木係（☎92-8291）

「8月中に審議会からの答申を受けて、私が最終的に決断したいと思っている。これまでの経緯をはじめ、行政の継続性の点で国土交通省や県とわが市の信頼関係などの課題も多いが、さまざまな正しいデータを皆さんに出していきたい。架けるならば愛される橋に、止めるためにはみんなが納得できる理由でなければならない。この議論を、市民に知らせることで、橋の将来を市民みんなで考えたい。それをこの審議会から発信していただき、市民が考えて市民が実行する最初の問題としたい」と、あいさつする片岡市長

第1回の総社市高梁川整備方針審議委員会の様子。委嘱状の交付後、高梁川新架橋についての審議が始まった

人材の育成を主眼に

■人事考課制度策定委員会

4月18日に開かれた第1回の人事考課制度策定委員会

人材の育成のための人事考課制度を導入しようと4月18日、人事考課制度策定委員会（委員長：竹田正彦副市長）が発足しました。

市の目指す人事考課制度とは、組織の目標の実現や市民サービスを向上させるため、人材育成や能力開発を図る人事管理制度です。委員会は、市内外の民間企業の人事担当者ら7人と市職員12人で構成されています。

「『自立できる総社市』を目指すには、まず、職員が変わらなければならない」。民間の考え方に触れ、意識改革を図り、自ら考え自ら実行できる職員を育成することに主眼を置いた制度づくりを目指します。

今後、今年8月までに委員会を5回開催し、制度を作りあげ、10月から本格導入に向けた試行を行う予定です。

問い合わせ　総務課人事係（☎92-8220）